木村敏の存在構造論について

―「存在構造尺度」作成の試みを通して ―

松　下　姫　歌

On Kimura's Theory of the Structure of Existence

― An Attempting to Construct the Structure of Existence Scale ―

MATSUSHITA Himeka

問　　題

1　木村敏の存在構造論

木村敏（1976, 1979, 1980, 1981, 1982, 1984, 1985）は，従来の症候論的な疾病分類では捉えることが困難な症例が多く存在し，個別的臨床症状や状態像のみからでは病像を動かしている基本構造を判断することができないことを指摘，神経症から精神病に至る状態像水準の区別を超えた，成因論的共通性を有する基本構造への視点による質的な区別の必要を提唱し，次の3つの基本的存在構造をあげている。

① アンテ・フェストゥム ante festum 構造，すなわち，自己が現実を離れた未知の次元での自己実現を求める分裂病親和的存在様式。

② ポスト・フェストゥム post festum 構造，すなわち，自己が完了態的な未済の回復不能性を恐れる単極うつ病親和的存在様式。

③ イントラ・フェストゥム intra festum 構造，すなわち，生物学的「主体」（とその意識）が現在の瞬間において自然との永遠の合一を求める「急性転機」親和的存在様式。

ただし，ここでいう「主体」Subjekt とは，「有機体と環境とが絶えず出会っているその接触面で，この出会いの根拠として働く原理」（Weizsäcker, V. v., 1973）を指す。有機体が環境と出会っている限り，その出会いの中に主体が成立している。主体は確実な所有物ではなく，絶えず獲得しつづけなくてはならないものである。主体の統一性は，非恒常性と「転機」とを乗り越えて不断に繰り返される回復においてはじめて構成される。ある一つの出会いの断絶は主体にとって消滅の危機を意味する「転機」Krise だが，そこには新しい別の出会いが生じ，新しい主体が誕生している。転機において，主体（という原理）はそれ自身を変化させ，古い原理が捨てられ新しい原理が獲得されることによって，主体とその統一性の獲得が可能になる。

これらの3つの存在構造に関し，以下に，木村の論にしたがって述べ，必要に応じて筆者による敷衍を加えていくことにしよう。

木村（1979）は，「自己とは，それ自身にかかわる一つの関係」すなわち「ノエシス的な差異化のいとなみが，それ自身との差異の相関者としてのノエマ的客体を産出し，逆に〔そのことが〕このノエマ的客体を媒介としてそれ自身をノエシス的自己として自己限定する〔ことになる〕という，差異の動的構造のことである」としている（〔　〕内筆者註）。ここで，ノエシス面とは，一瞬一瞬の現在における直接的な生命活動の一貫としての行為的・はたらき的・産出的な面をさす。ノエマ面とは，ノエシス的作用によって産出され意識にのぼった表象面をさす。ノエシス面そのものは直接には意識されないがノエマ面を通して背後的に意識される。

つまり，自己の本体はノエシス的原理としての主体であり，ノエマ的自己ではないが，ノエシス面が自己として経験され自覚されるにはノエマ的表象が必要となる。ノエシス的自発性が自らを差異化し，自己としてのノエマ的表象（ノエマ的自己）を産み出すことによって，ノエシス的自発性自身を自己（ノエシス的自己）として限定することになる。

このような，刻々とノエシス面の差異化によってノエマ面が産み出され，そのノエマ面によってノエシス面が限定されるという，結局はノエシス面によるノエシス面の自己限定といえる側面を，（その側面だけをとりだして言うならば）ノエシス面を統合するより高次のノエシス面という意味で，「メタノエシス面」と呼ぶことができる。一瞬一瞬の現在における直接的な生命活動の一貫としてのはたらきであるノエシス面を，そのノエシス面自身が，みずからの全体の方向を与え統合するはたらきである。このメタノエシス的なはたらきと同じことを，木村は「共通感覚」とも呼んでいる。別の言い方をすれば，共通感覚とは，自己の，世界に向っての実践的・行動的な関与を媒介し，生命との関わりを捉える感覚ないしはたらき，のことである。また，これは通常は意識されることのない「自明性」である。

a）アンテ・フェストゥム構造とポスト・フェストゥム構造

この，ノエシス面がノエシス面自身を差異化してノエマ面を産みだし，そのノエマ面を通じて自己限定するという契機，いいかえれば，ノエシス的自発性が自らを差異化することでノエマ的客体を自らに向け対置し「自分自身へと到来する」ことで自己たりうるという，自己実現が常に経験的自己の一歩先に起こっている契機が，アンテ・フェストゥム的契機である。アンテ・フェストゥム構造は，特に，臨床的には分裂病において，発達的にはやはり分裂病の好発期でもある青年期において尖鋭化して現れる。自己実現が未知の次元（未来・可能態）にあるため，自己が実現すべき場所に他性が入り込む可能性に常にさらされ，いわば「自己の他者化」の危機に脅かされることとなり，「自己自身でありうる」ということが常に問題となる。

また，本来，このような自己の差異化・限定には，本来不連続なものである自己がその都度獲得されつづけ，連続性と一貫性をもったまとまりとして「所有」されていることが必要であり，新たに獲得される自己は既在的な自己を発展的に継続するものでなくてはならない。この意味で，自己が自己であるということには，常に既在性の全体からの制約が課せられ，負課的な性格が与えられている。この負課的性格は，既在的自己の統一性が自己によって肯定されているほど強い当為的要求となり，その都度の自己実現は「自己自身に遅れをとる」危険にさらされる。この契機がポスト・フェストゥム的契機である。この契機は特に，うつ病，退行期において尖鋭化してあらわれる。

アンテ・フェストゥムとポスト・フェストゥムの２つの存在構造は，人間の対自己・対世界関係を大きく２つの範疇に分ける，相互排除的な方向をもつ質的に異なった基本構造とされる。一人の人間は両方向をもつが，その両性間の不均衡が「気質」や「精神病的事態」として前景にあらわれる。特に自己の立て直しの努力においては，いずれか一方への一層尖鋭化した偏向が支配的となるとされる。

とはいえ，この２つの存在構造は，単純に，互いに同等の位置を占めて対極をなすようなものではない（木村，1985他）。このことについて，筆者による敷衍を加えて述べることにしよう。

アンテ・フェストゥム構造の尖鋭化は，ノエシス面の差異化不全＝ノエマ面の限定不全＝ノエシス面の自己限定不全という事態による。換言すれば，ノエシス的自己（自己限定をうけたノエシス面）の確立不全とノエマ的自己の確立不全は同時（同事）的であり，そもそもノエシス面の差異化不全に端を発している。したがって，ここで問われる「自己自身でありうる」か否かという場合の「自己」とは，ノエシス的自己であるけれども，そこにノエマ的自己も含まれているのである。

このように，アンテ・フェストゥム的契機は，自己の成立そのものに関わる契機であり，この契機の尖鋭化は「自己が他ならぬ自己でありうるか」ひいては「自己がありうるか」という問題として現れる。一方，ポスト・フェストゥム的契機は，そのような自己の成立の上に成り立つ。ノエマ的自己として自己限定することでノエシス的自己が成立する瞬間に，さらに自己の成立に対する制約となるのである。

したがって，ポスト・フェストゥム構造の尖鋭化とは極論すれば「ノエマ的自己としての自己限定」の先鋭化であり，アンテ・フェストゥム的な「自己であるか」「自己があるか」といった自己の成立そのものの問題は，いわば「自明」なものとしてクリアされているといえる。しかし，ノエマ的自己の自己限定の尖鋭化は，ノエマ的自己が自己の成立に対する制約となる傾向の尖鋭化となるであろう。つまり，本来の自己の源であるノエシス面の差異化に対する，既在的なノエマ的自己による制約力が強まるため，常に既在的ノエマ的自己の基本線に沿った自己が産み出されつづけるという事態を生むと考えられる。

また，連続性と一貫性をもってノエマ化され続ける既在的自己は「世間的自己」（木村，1985）でもある。つまり，既在的自己とは世間と同化し共有された自己という側面をもつ。それが手放すことのできない常に獲得し続けなければならないものとして，自己の差異化・限定に対する制約的性格が強いほど，自己は世間に同化した自己を産みだし続けることになる。自己化した世間によって自己実現が制約を受け，そこから外れることは自己の存続の危機となるのであり，ここに，アンテ・フェストゥム構造の尖鋭化による「自己の他者化」とは異なる意味での自己の他有化が認められる。すなわち，「他者の自己化」である。

このような意味で，アンテ・フェストゥムとポスト・フェストゥムの２つの存在構造は「同一平面上で未来と過去の両方向を向いているものではなく，異った２つの平面におけるそれぞれ独立の微分的方向」（木村，1985）である。つまり，これらは必ずしも意識や体験の事実的な内容における未来志向性や過去志向性と一義的に結び付くものではない。過去に対しアンテ・フェストゥム的な目を向けたり，未来に対しポスト・フェストゥム的な態度をとったりすることもありうる訳である。例えば，ポスト・フェストゥム的な過去志向が，現在完了的な近い過去に向けら

れた，それまでの人生の基本線からの逸脱を招いた失策や打撃に対する悔やみあるいはその回復願望であるのに対し，アンテ・フェストゥム的な過去志向は，過ぎ去って帰らぬ遠い過去に向けられるものであり，人生全体への根本的な変更への願望がこめられている場合が多い。また，アンテ・フェストゥム的な未来志向に見られる先走りが，未確立の自己実現を可能態の未来に賭けている反面，それが保証がないばかりか，むしろそれを決定的に不可能にしかねない未来の不確定性を恐れるのに対し，ポスト・フェストゥム的な取り越し苦労は，確立済みの人生の基本線から外れることを恐れるのである。

b）イントラ・フェストゥム構造

先に「3つの存在構造」という言葉を用いたが，アンテ・フェストゥムとポスト・フェストゥムの2つの存在構造が，上に述べてきたような，差異の動的構造としての自己の成立にまつわる互いに方向と質を異にする2つの基本構造であるのに対し，イントラ・フェストゥム構造は，これら2つの存在構造と対立するものでも三者択一的な同等の位置でもない，独自の位置を占めるものである。イントラ・フェストゥム構造とは，先の2つの存在構造をそもそも可能にするような根源としての「垂直の次元，深さの次元（木村，1982)」であり，先の2つの存在構造と本質的に背反しない「垂直な量的規定（木村，1982)」として関わっている。つまり，自己を産み出すおおもとのはたらきそのものであるノエシス的自発性（あるいは〔生物学的〕主体）の一瞬一瞬の現在における直接的な生命活動に親和的なあり方である，と言ってもよいだろう。それゆえ「転機」に親和的な構造である。

イントラ・フェストゥム構造においては，自己は常に「その都度の刹那（木村，1980)」としての現在にある。ここでいう現在とは，未来や過去と同列に並置されうる抽象的概念として考えられた現在ではなく，客観的幾何学的な暦時間の上での過去から未来への単なる通過点としての現在でもない。つまり，未来や過去といった時間をそもそも可能にするような，未来と過去を自らの中から生み出す源泉点たる「原時間（木村，1982)」としての現在，「瞬間における時間の断絶」としての「永遠の一瞬」たる「無限の」現在（木村，1980）である。既に述べた文脈において換言すると，イントラ・フェストゥム構造におけるこのような現在にある自己とは，差異の動的構造としての自己の成立（アンテ・フェストゥム的契機とポスト・フェストゥム的契機）において，自己と非自己あるいはいままでといまからに引き裂かれる以前の，いわば「自己と言う（ノエマ的限定を与える）ことができない」「原自己」（木村，1982）である。

このような「原時間」である現在の現前としての「原自己」は，日常の自己意識や時間意識が破られて，現在が未来や過去との繋がりを失い，純粋な現在それ自身として出てこなくては見えてこない。そのような，イントラ・フェストゥム構造の尖鋭化において姿を現す非日常性は，アンテ・フェストゥム構造やポスト・フェストゥム構造の尖鋭化において現れる非日常性とは異なる。上述したように，アンテ・フェストゥム構造とポスト・フェストゥム構造は一般の日常性を構成している2つの意味方向をもつ構造であり，両者間の均衡を破った極端な形で突出して非日常の狂気に立ち至った病態が，前者の尖鋭化の極限にある分裂病と，後者の尖鋭化の極限にあるうつ病である。これら2つの病態は「ともに日常性の外部境界を異なった2つの方向に逸脱したところで成立する非日常性（木村，1982)」である。これに対し，イントラ・フェストゥム構造

の尖鋭化における非日常性は「日常性全体の基底面にかかわる『底抜け』の事態であって，一つの純粋形態に収斂しうるような単一の方向をもたない（木村，1982)」ものであり，病像の「非定型性に関わる（木村，1980，1981，1983等)」ものとされる。

目　　的

本研究では，木村の３つの存在構造，すなわちアンテ・フェストゥム構造，ポスト・フェストゥム構造，イントラ・フェストゥム構造，をそれぞれ測定する尺度を作成することを第１の目的とし，これを用いて木村の存在構造論を検証することを第２の目的とする。

方　　法

1　質問紙の作成

a）アンテ・フェストゥム ── ポスト・フェストゥム質問紙

木村の存在構造論とアンテ・フェストゥム構造とポスト・フェストゥム構造に関する臨床記述をもとに筆者が独自に作成した。

これら２つの存在構造については，木村自身，当初は「人間の対自己・対世界関係を大きく２つの範疇に分ける互に正反対の方向をもった基本構造（木村，1976)」というように，一つの軸上の対極的な位置を占めるものとして考えていたが，後の論文（1985等）で，両者は自己と世界に対する関わり方を大きく２つに分けるものではあるが，それぞれ別の軸をもつものとして述べている。また，これら２つの存在構造の違いは決定的ではあるものの，各々のあり方を言葉で表現した場合，両者の質の違いがかなり微妙なものとなる場合も想定しうる。これらの問題も含めて検討する為，一つの質問紙として作成した。

総項目数は40項目，うちアンテ・フェストゥム構造に関するものと想定される項目25項目，ポスト・フェストゥム構造に関するものと想定される項目15項目からなる。具体的には，アンテ・フェストゥム項目としては，〈自己の実現を現実を離れて未来に置く傾向〉，〈未知・遠さへの指向〉，〈先取り性〉，〈超越的・非現実的なものへの親和性〉，〈革新的思想・根本的改革指向〉，〈独自性・主体性への欲求〉，等に関するものを作成した。ポスト・フェストゥム項目としては，〈自己の実現を完了的過去に置く傾向〉，〈近さへの指向〉，〈保守的思想〉，〈周囲への同調を求める傾向〉，〈自己主張を控える傾向〉，等に関するものを作成した。評定尺度は，「全然あてはまらない」から「かなりあてはまる」まで，１～６の６段階とした。

b）イントラ・フェストゥム質問紙

木村の存在構造論とイントラ・フェストゥム構造に関する臨床記述をもとに筆者が独自に作成した。

イントラ・フェストゥム構造は，アンテ・フェストゥム構造やポスト・フェストゥム構造と対立するものでも，三者択一的な並列的な位置にあるものでもなく，それら２つの存在構造をそもそも可能にするような源泉的な位置づけをもつ構造であり，別の質問紙として作成した。総項目

数は40項目。具体的には，〈自己の実現を「永遠の現在の一瞬」に置く・賭ける傾向〉，〈「転機」・「発作」親和性〉，〈自然や他者との無限の合一感〉，〈ノエシス的なものに開かれたあり方〉，等に関するものを作成した。評定尺度は，「全然あてはまらない」から「かなりあてはまる」まで，1～6の6段階とした。

2 被検者

被検者は大学生1・2回生231人（男子85人，女子143人）。平均年齢19.140歳（SD 1.036）（男子19.435歳（SD 1.190），女子18.965歳（SD 0.891））。

3 手続き

本調査では，集団法により，同一被検者に，アンテ・フェストゥム――ポスト・フェストゥム質問紙，イントラ・フェストゥム質問紙，の2つの質問紙を施行した。

結果および考察

a）アンテ・フェストゥム――ポスト・フェストゥム質問紙についての分析

この質問紙については，アンテ・フェストゥムとポスト・フェストゥムの両概念の内容と関係に対する検討の意味から，全項目についての因子分析をおこなった後，各因子についての項目分析によって，当該概念との関連が小さいと考えられる項目を省いた。

(1) 因子分析および項目分析

全40項目について，「かなりあてはまる」から「全然あてはまらない」に各々6～1点を与え，固有値と解釈可能性を検討し因子数を3に指定して主成分法による因子分析をおこなった。各因子について varimax 回転後の因子負荷量 .4 以上の項目を採択したところ，13項目が除かれ，第1因子12項目，第2因子7項目，第3因子8項目，合計27項目が残された（表1）。但し，項目4は第1因子の負荷量も .4 を超えるため省き，6項目とする。

得られた各因子について，被検者ごとに，当該因子の下位項目の得点を合計することで，各因子得点を算出した（正規分布）。次に，各因子得点の上位 1/4・下位 1/4 にあたる被検者をそれぞれ上位群・下位群とし，各因子得点と当該因子の下位項目について，両群間の平均値の有意差についてt検定をおこなった。その結果，各因子得点と当該因子の下位項目すべてについて .01%水準で有意差が認められた。さらに，各因子の合計得点と当該因子の下位項目との間の Pearson の相関係数を求めたところ，すべて $r = .40$ 以上であり，無相関として除外される項目はなかった。Cronbach の α 係数は，第1因子が .790，第2因子が .688，第3因子が .624であった。各因子の内的一貫性はほぼ確認されたと言えよう。

以下に，得られた3つの因子の内容について検討する。

第1因子は，12項目中8項目がポスト・フェストゥム項目と想定したものであり，〈自己の実現を完了的過去に置く傾向〉，〈近さへの指向〉，〈保守的思想〉，〈周囲への同調を求める傾向〉，〈自己主張を控える傾向〉に関するものが含まれている。全体に，これまで生きてきた（完了的

表1　アンテ・フェストゥム――ポストフェストゥム尺度（A－P尺度）因子分析（主成分解・因子数＝3・varimax 回転後）の結果

項目番号		F1	F2	F3
F1				
16	「取り返しのつかないこと」になるのがこわい。P	.682	－.069	－.024
17	他人に何をされるかわからない，という秘かな不安がある。P	.644	.167	.318
3	すんだことをくよくよ考える方である。P	.607	－.066	.124
22	周りに期待されると，その期待にこたえねば，とプレッシャーを強く感じる。P	.578	－.226	－.098
19	今まで自分がしてきたことがだいなしになるようなことを，避けようとする。P	.577	.061	－.095
7	未知のものやわからないことが怖い。	.553	.049	.108
13	社会的に安定したレールに乗って進む方が楽だと思う。P	.514	－.165	－.181
36	一所懸命にやったことが失敗したとき，「自分が今までやってきたことは何だったのだろう」という徒労感におちいる。P	.513	.102	－.064
30	自分が今まで歩んできた道から外れることをするのは嫌だ。	.505	－.141	－.230
5	まわりと違ったことをするより，まわりに合わせておく方が安心する。P	.499	－.288	－.235
24	早く大人になりたい，と願う一方で，大人になることが怖い。	.471	.221	.043
15	小説などを読んでいても，早く結末が知りたくて，落ち着いて読んでいられない方である。	.400	－.047	.123
F2				
23	自分が本当にしたいことは何か，ということにこだわる。	.055	.705	.006
29	新しい変化を求める方である。	－.109	.582	.130
33	未知のものやわからないことに強く魅かれる。	－.174	.572	.047
34	「自分が自分でしかありえない」ところを追い求めているふしがある。	.064	.546	.101
14	「本当の自分」とか「本当の自分らしさ」を，もっと純粋に実現したい。	.181	.535	－.131
4	「まだ本当の自分ではない，早く本当の自分にたどりつきたい」と思う。	.409	.422	.112
1	自分は生き急いでいる，と思うことがある。	.054	.402	－.041
F3				
40	一般社会の時間に合わせて行動するのが苦痛である。	－.015	.085	.759
20	目の前の事柄や，現実的なことには，どちらかというと興味がない。	.005	.108	.480
9	もともと，まわりの人に合わせるのは好きでない。	－.069	.188	.472
39	待つ，ということが苦手である。	.105	.053	.468
37	一般社会の時間の流れと自分自身の中での時間の流れとの間には，大きなズレがある。	.249	.322	.401
8	自分に与えられた役割は果たさないと気が済まない。P	.159	.379	－.428
27	集団の集合時刻には遅れる訳にはいかないし，まず遅れることはない。P	.114	.085	－.458
35	近所づきあいは大切だと思う。P	.019	.208	－.525
	固有値	4.875	3.804	2.760

過去）世間に同調的な基本路線から外れ「取り返しがつかない」事態に陥ることを恐れる《「既在的自己」指向》的なポスト・フェストゥム構造をカバーしていると思われる。残りの4項目（項目17，7，24，15）は，項目作成時は，アンテ・フェストゥム的な，自己実現を未来に置くがゆえの，他性に自己を脅かされる傾向や先走り傾向と想定した項目であったが，むしろ，ポスト・フェストゥム的な，それまでの自分の基本路線が崩されることに対する不安に関する項目としての意味をもつようである。第1因子はポスト・フェストゥム構造に関する因子と捉えてよさそうである。

第2因子は，6項目すべてアンテ・フェストゥム項目と想定したものであり，特に〈自己の実現を未来におく傾向〉，〈未知・遠くへの志向〉，〈先取り性〉，〈独自性・主体性への欲求〉に関する項目が中心となっている。すなわち，第2因子は，まだここにはなく未知の次元にある，より

純粋な他ならぬ自己・独自性・主体性を追い求める傾向としての，アンテ・フェストゥム構造の《「未来的自己」指向性》の面に関する因子と捉えられよう。

第3因子は，8項目中5項目がアンテ・フェストゥム的と想定した項目，3項目がポストフェストゥム的と想定した項目からなり，後者は前者の逆転項目となっている。

まず，前者の5項目は〈独自性・主体性への欲求〉と〈超越的・非現実的なものへの親和性〉に関する項目である。おなじアンテ・フェストゥム的な〈独自性・主体性への欲求〉に関する項目と想定したものが，第2因子と第3因子に分かれ，別々の因子として抽出されている。第2因子における〈独自性・主体性への欲求〉は，未知の次元にあるべき純粋な他ならぬ自己を追い求める動きの側面であるのに対し，この第3因子における〈独自性・主体性への欲求〉は，自分自身の中での時間や起こっている世界が「世間一般」のそれと同調せず，むしろ「他性」をはらんだ「世間一般」の時間や世界を忌避することで，他ならぬ自己を追い求める動きの側面であると言える。

加えて，後者の3項目はポスト・フェストゥム的と想定した〈周囲への同調を求める傾向〉や〈近さへの志向〉に関する項目であり，先の5項目の逆転項目として含まれている。第1因子において抽出された〈周囲への同調を求める傾向〉や〈近さへの志向〉が，自分のこれまでの世間に同調的な基本路線から外れてしまう事態を恐れる側面である（項目22「周りに期待されると，その期待にこたえねば，とプレッシャーを強く感じる」，項目5「まわりと違ったことをするより，まわりに合わせておく方が安心する」）のに対し，第3因子において抽出されたそれは，「世間一般」の時間や世界と同調し，むしろそれを自己化している《「世間一般性」の自己化》とも言える側面であり，さらに，「世間一般」の時間や世界と同調せず忌避することで自分自身の時間や世界（独自性・主体性）を追い求める動きと正反対の動きとして抽出されている。

よって，第3因子は，全体として，《「世間一般性」忌避的な自己指向性》の面に関する因子と捉えられよう。

(2) 因子間の相関

また，因子分析によって得られた因子間の関係を調べるため，3因子間のPearsonの相関係数を算出した。第1因子 ── 第2因子間が $r = .087$，第1因子 ── 第3因子間が $r = -.014$，第2因子 ── 第3因子間が $r = .071$（いずれも $p < .0001$）であり，3因子間には相関がほとんど見られなかった。このことから，以上の3因子は互いに独立な因子とみなすことができる。

木村の論におけるアンテ・フェストゥム構造およびポスト・フェストゥム構造の概念は3つに分けられ，それぞれ独立した概念であることが確かめられた。すなわち，両構造は，以下に述べるように，部分的には互いに軸を異にする独立した概念であり，部分的には一つの軸上の両極にある正反対の概念であることが確かめられた。

まず，木村の述べているポスト・フェストゥム構造については，これまで生きてきた（完了的過去）世間に同調的な基本路線から外れ「取り返しがつかない」事態に陥ることを恐れる《「既在的自己」指向性》（第1因子）として，比較的まとまった一つの概念として抽出されたのに対し，アンテ・フェストゥム構造については，木村の論では一つの概念として述べられていた，未

知の次元にあるべき純粋な他ならぬ自己を追い求める動きとしての《「未来的自己」指向性》の側面（第2因子）と，「他性」をはらんだ「世間一般」の時間や世界を忌避することで，他ならぬ自己を追い求める動きとしての《「世間一般性」忌避的な自己指向性》の側面（第3因子）とが，独立した別々の概念であることが確かめられた。

加えて，木村のアンテ・フェストゥム構造のうちの《「未来的自己」指向性》の側面とポスト・フェストゥム構造の《「既在的自己」指向性》とは，1つの軸上の両極にある概念ではなく，互いに軸を異にする独立した概念であることが確かめられた。つまり，一方の傾向が高いことがすなわち他方の傾向が低いことを意味するのではなく，両者は並存しうる側面である。一方，アンテ・フェストゥム構造のうちの《「世間一般性」忌避的な自己指向性》の側面と，ポスト・フェストゥム構造のうちの《「世間一般性」の自己化》の側面とは，一つの軸上の両極にある正反対の概念であることが確かめられた。つまり，一方の傾向が高いことがすなわち他方の傾向が低いことを意味する。

以上について，木村の存在構造論に立ちかえって検討してみよう。木村の存在構造論では，問題でも述べたとおり，自己を，一瞬一瞬の現在における直接的な生命活動の一貫としてのはたらきであるノエシス面が自らを差異化した自己の像といえるノエマ面を産み出すことで自己限定する，という差異の動的構造として捉える。ノエシス面は自己としてのノエマ面（ノエマ的自己）を産み出すことによって自らを自己（ノエシス的自己）として限定することで獲得・体験することができ，自らの全体の方向が与えられる。そのようなその都度の現在におけるノエシス面の，自らを捉えつつ方向づける動き（メタノエシス面）によって自己とその統一性の獲得が可能になる。この動的構造の「ノエシス面が自らを捉えるべく他性を排除することで差異化し，自らのノエマ面を産み出そうとする」契機がアンテ・フェストゥム的契機であり，「自己として所有された既在的自己がこのようなノエシス面の自己限定への動きに対する制約となる」契機がポスト・フェストゥム的契機である。この両契機は，それぞれ，上に検討してきたアンテ・フェストゥム構造の《「未来的自己」指向性》の側面（第2因子）と，ポスト・フェストゥム構造の《「既在的自己」指向性》の側面（第1因子）とを指していると思われる。

自己という一つの差異の動的構造における二つの側面ともいうべき，アンテ・フェストゥム的契機とポスト・フェストゥム的契機の間に，その都度の自他の区切りに関する折り合いがつけられ，自己や他者や間主体的な世界が成立している。この意味においてアンテ・フェストゥム構造とポスト・フェストゥム構造とは「自己が自己自身や世界とどのようにかかわるかに関する（木村，1979）」「異なった2つの平面におけるそれぞれ独立の微分的方向（木村，1985）」である。既に述べたように，この両契機の間のほどよい自他の区切りが破られる事態においては，いずれか一方の契機が尖鋭化して現れることになる。アンテ・フェストゥム的契機，ポスト・フェストゥム的契機が，それぞれ尖鋭化する事態についてあらためて考えてみよう。

ノエシス的はたらきそのものは，本来，個別的自己の本体でありながらもすべての有機体を成り立たせる共通のはたらきであり，人間存在にとって自己や間主体的な世界が成立する基盤となるはたらきである。それゆえ，ノエシス的はたらきは，本来，自己でも非自己でもありうるという性格をもつと言える。ノエシス的はたらきは，その本来的性格ゆえに，自らを「自己」の相のもとに捉えようとする差異化・限定への動きが強まるほど，他と「他ならぬ自己」との差異化限

定（ノエマ化）力が，逆説的に弱まることになろう。「自己の他者化」の危機に対する敏感さが逆説的に「自己の他者化」の危機を招くわけである。つまり，ノエシス的はたらきは自らを捉えようとすればするほど，自らを「自己」として限定するに足るノエマ面を産むことが困難となり，メタノエシス的に自己を方向づけることができず，そのような不全なノエマ面を通しては，ノエシス面が「他ならぬ自己」として捉えられ体験される（ノエシス的自己）ことができない。このことが，自己の本体であるノエシス的はたらきを自他差異化し「他ならぬ自己」として捉えようとする自己成立に向けての動きであるアンテ・フェストゥム構造を尖鋭化させることとなろう。

一方，ポスト・フェストゥム構造の尖鋭化は「ノエマ的自己によるノエシス面の差異化自己限定」の尖鋭化として捉え得る。この事態においては，自己は「ノエマ的」「既在的」に成立し，「他ならぬ自己である」ことで「自己がありうる」というアンテ・フェストゥム的な自己の成立の問題は自明的にクリアされているといえる。しかし，このようなノエマ的自己としての自己限定の優位という事態は，自己の本体でありながら本来「他ならぬ自己」として捉えきれないはずのノエシス面を，差異化して自他の線引きをおこない自己化する力が強いということであるといえよう。換言すれば，ノエシス面が「他ならぬ自己」たるノエシス面自身をより純粋に捉えようとする傾向の弱さ，ノエシス面の自他差異化の自己化に傾いた精度の低さと言える。そこには既に「他者の自己化」の萌芽が見られる。「ノエシス面のノエマ化傾向」と「ノエマ的自己によるノエシス面差異化の支配」との間で循環的に自己限定され成立する自己は「既在的・ノエマ的自己」に重心をおいたものとなろう。自己の成立の動きそのものが自己化に傾くことで，逆説的に「他者の自己化」をはらむのである。

このように，一方ではアンテ・フェストゥム構造の尖鋭化として「自己の他者化」の危機を招き，他方ではポスト・フェストゥム構造の尖鋭化として「他者の自己化」の危機を招く，といった，本来一つの柔軟な動的構造に含まれている両契機の一方が突出して硬直化した構造となってしまう事態，あるいは傾向として両契機のうちのどちらかに重心をおいた構造となる事態，がおこりうる。では，この「両契機のどちらか一方への傾きや突出を決定する契機」は何であろうか。

この契機に関わるのが，今回，木村の論じているアンテ・フェストゥム構造とポスト・フェストゥム構造の中の互いに正反対の性質をもつ部分として抽出された（第3因子），アンテ・フェストゥム構造のうちの《「世間一般性」忌避的な自己指向性》の側面，対，ポスト・フェストゥム構造のうちの《「世間一般性」の自己化》の側面であると考えられる。すなわち，「世間一般性」の内包する意味方向が，前者と後者とでは正反対なのである。

前者（アンテ・フェストゥム）においては，「世間一般性」は，自己とは異質の，自己にとって否定的な原理である。「世間一般性」の源はノエシス的自発性にそもそも備わっている「すべての有機体を成り立たせる共通するはたらき」としての側面と考えられるが，この「自己の内部における他者性（外部性）」を否定せずには，自らを自己として捉えることができず，そのために自らの世界や時間は基本的に世間一般のそれとは次元を異にすることとなる。一方，後者（ポスト・フェストゥム）においては，「世間一般性」は，自己にとって肯定的な原理であり，むしろ非自己ではない自己そのものと化している。個別的自己の本体でありつつ，すべての有機体を成り立たせているはたらきと共通するはたらきであるノエシス的自発性が，自らを捉えようとするときに，自らに内包されているどちらの側面の方向へむかうかは，結局，その自他に共通する

はたらきの側面に対するありかたに左右され，それが「世間一般性」との関わりのありかたの違いとしてあらわれうるといえる。

以下，第1因子を「ポスト・フェストゥム尺度（P尺度・「既在的自己」指向性）」，第2因子を「アンテ・フェストゥム」尺度（A尺度・「未来的自己」指向性）」，第3因子を「アンテ・フェストゥム ── ポスト・フェストゥム」尺度（A－P 尺度・「世間一般性」忌避的な自己指向性 ── 「世間一般性」の自己化）」として扱うことにする。

b）イントラ・フェストゥム質問紙についての分析

この質問紙については，全項目についての項目分析によって，当該概念との関連が小さいと考えられる項目を省いた後，因子分析をおこなった。その手続きと結果は以下の通りである。

(1) 項目分析

全40項目のうち，逆転項目5項目を除く35項目について，「かなりあてはまる」から「全然あてはまらない」に各々6～1点，逆転項目については1～6点を与え，被検者ごとに合計得点を算出した（正規分布）。次に，合計得点の上位1/4・下位1/4にあたる被検者をそれぞれ上位群・下位群とし，合計得点と各項目について，両群間の平均値の有意差についてt検定をおこなった。その結果，5％水準で有意差が見られなかった3項目が除外された。それ以外の項目については，5％～.01％水準で有意差が認められた。さらに，合計得点と各項目との間の Pearson の相関係数を求め，r＝.20以下の項目（2項目）を除外し，計35項目を採択した。

(2) 因子分析

(1)の結果得られた35項目について，固有値ならびに解釈可能性を検討し因子数を3に指定して主成分法による因子分析をおこなった。各因子について varimax 回転後の因子負荷量 .4以上の項目を採択したところ，9項目が除外され，第1因子に12項目，第2因子に7項目，第3因子に7項目，計26項目が残された（表2）。この26項目の Cronbach の α 係数は .831であり，内的一貫性は相当高いとみなすことができよう。

この結果から，イントラ・フェストゥム構造は，全体としては一つの傾向をもつ次のような3因子からなることが確かめられた。第1因子は，全体に《自然や他人との合一感》と《ノエシス的自発性の感覚》に関するものといえる。第2因子は，ノエシス的自発性が自らの制御を超えそうな瞬間の有無に関する項目（13，14，10）や，没体験・没自的に外的現実を離れた時間の有無に関する項目（1，7，11）を中心にまとまっている。これらはいずれも，体験を成り立たせている異なる存在次元間の垂直方向の動きと捉えることができよう。全体として《存在次元の変化（の有無）》に関する因子と捉えることができよう。第3因子は，《自己実現を現在の一瞬に賭ける傾向》，すなわち，自分の中から自分を突き動かすものに開かれ，それによって行動する，一般社会規範や時間展望を超えたあり方，に関する因子と言える。

以下，この26項目を「イントラ・フェストゥム尺度（I尺度）」として扱うことにする。

表2 イントラ・フェストゥム尺度（I尺度）
因子分析（主成分解・因子数＝3・varimax 回転後）の結果

項目番号		F1	F2	F3
F1				
38	自然の中に自分がとけ込んでいくような，自分の中に自然があるような，体験をしたことがある。	.731	.144	.145
22	自然の偉大さに，ひれ伏したくなるような思いを，体験したことがある。	.699	.223	.006
3	自然の美しさや豊かさに，我を忘れてしまった，という体験がある。	.618	.221	−.139
9	自分の中に，すべてのものに宿り，すべてのものを生かしているいのちと同じいのちが，いきづいているのを，感じる。	.573	−.107	.010
20	他人と一体感を感じたことがある。	.573	.018	.039
29	自分の中に，自分を突き動かす原動力のようなものがあるのを感じる。	.566	.038	.360
33	地震・火山の噴火・台風・洪水などを体験したり見聞きしたりして，「自然のもつこの物凄い力が自分の中にも宿っているのだ」と感じたことがある。	.494	−.017	−.101
8	本来，祭りごとが好きな方だ。	.468	−.020	.297
40	自分の中に体験とか気持ちとかがあふれて，言葉がそれに追いつかないようなことがある。	.467	.458	−.094
6	何かつくることが好きである。	.445	.222	.202
2	「今，これをいないと，絶対に後悔する」と思ったら，どんなことがあっても突き進んでしまう。	.435	.397	.111
36	身体を動かすことが好きである。	.402	.025	.229
F2				
13	話していて，話すスピードが変わったり，声が出にくくなったり，のどがつまるような感じがしたりすることがある。	−.076	.663	−.188
1	何かに熱中していて，ふと気づくと，何時間も経っていた，ということがよくある。	.246	.566	−.019
14	じっとしていられないほど，気持ちが落ち着かないときがある。	−.050	.492	.399
7	何かしている時に，人に呼ばれても，気が付かないことがある。	.160	.487	.054
11	時間が経つのが早いときと遅いときがある。	.065	.462	.064
10	一瞬，何かを破壊してしまいたいような気分に駆られることがある。	−.139	.460	.344
5	欲しいものをどんなことをしても手にいれようとする人を，とがめる気持ちはない。	.158	.428	.166
F3				
15	どちらかというと，自分は，一般的な善悪で物事を見ていない。	−.235	.099	.586
30	急にスピーチを求められても，そのときの思い付きでしゃべることができる。	.250	−.059	.555
37	たとえ後で困るようなことをしていても，その時の充実感の方が勝ってしまうことが多い。	.307	.145	.528
27	ときどき，何か悪いことや人をびっくりさせるようなことをしたくてたまらなくなるときがある。	−.047	.397	.521
24	するしないに関わらず，自分は，賭事が好きな方だと思う。	−.041	.185	.407
34	その時の今の「一瞬」に自分のすべてを賭けてしまうようなことがよくある。	.355	.248	.406
23	大切な場面で，決断のあと行動するのでなく，瞬間的に自分の中から突き動かされるように迷わず行動に出る，ということがよくある。	.331	.205	.405
	固有値	4.700	3.037	2.976

(3) イントラ・フェストゥム尺度と他の3尺度との相関

存在構造論においては，既に述べたように，イントラ・フェストゥム構造はアンテ・フェストゥム構造とポスト・フェストゥム構造の基盤であり，本質的にこれらと背反しない量的規定とされる。この点を鑑みて，本研究では，イントラ・フェストゥム尺度を，ポスト・フェストゥムとアンテ・フェストゥムとは別の質問紙によって抽出した。しかし，イントラ・フェストゥム尺度と

ポスト・フェストゥム尺度，アンテ・フェストゥム尺度，ポスト・フェストゥム――アンテ・フェストゥム尺度の間の関係を確認しておくことは必要であろう。

この目的で，イントラ・フェストゥム尺度得点（IS）とポスト・フェストゥム尺度得点（ＰＳ），アンテ・フェストゥム尺度得点（ＡＳ），アンテ・フェストゥム――ポスト・フェストゥム尺度得点（ＡＰＳ）の間の Pearson の相関係数を算出した。IS-PS 間は r ＝ －.098，IS-APS 間は r ＝ .082と殆ど相関が見られなかったが，IS-AS 間は r ＝ .420とやや正相関が見られた。

この結果からいえるのは，本研究のイントラ・フェストゥム尺度は，ノエシス的なはたらきが体験として意識にのぼりやすいか否かでイントラ・フェストゥム的傾向を測定しようとしたものであるが，このようなノエシス的体験は，ノエシス面自身の差異化自己限定というはたらきそのものによって可能となる，ということと関係があるということであろう。原自己というべきノエシス面を自らの体験とすることは，アンテ・フェストゥム尺度で測られるような「ほんとうの自分」や「ほんとうにしたいこと」を「より純粋に体現しようとする」動きと同じベクトルを有する動きであるといえる。ポスト・フェストゥム尺度やアンテ・フェストゥム――ポスト・フェストゥム尺度にみられる，ノエシス的はたらきが自らを捉えようとする動きが柔軟さを失って一方の構造が先鋭化したあり方との間に一定方向の相関がないことは，さまざまな場合が存在する「非定型性」を示唆するものと考えることができよう。

以上，木村の存在構造論に基づいた「存在構造尺度」の作成の試みを通して，存在構造論自身を検討した。今回は，被検者が大学生に限られていたため，今後は，さらに年齢層をひろげての検討が必要であろうと考えられる。

《謝辞》本論文をまとめるにあたって，多忙な中，貴重な時間をさいて御指導下さった，河合俊雄先生に，厚く御礼申しあげます。

文　献

木村敏　1976　分裂病の時間論――非分裂病性妄想病との対比において――笠原嘉編　分裂病の精神病理５　東京大学出版会.

木村敏　1979　時間と自己・差異と同一性――分裂病論の基礎づけのために――中井久夫編　分裂病の精神病理８　東京大学出版会.

木村敏　1980　てんかんの存在構造　木村敏編　てんかんの人間学　東京大学出版会.

木村敏　1981　躁病と躁鬱病の関係についての人間学的・時間論的考察　木村敏編　躁うつ病の精神病理４　弘文堂.

木村敏　1982　時間と自己　中公新書.

木村敏　1984　てんかんの人間学　秋元波留夫・山内俊雄編　てんかん学　岩崎学術出版社.

木村敏　1985　直接性の病理　弘文堂.

Weizsacker, V. v.　1973　木村敏・浜中淑彦訳　1975　ゲシュタルトクライス　みすず書房.

（博士後期課程１回生，教育臨床心理学講座）